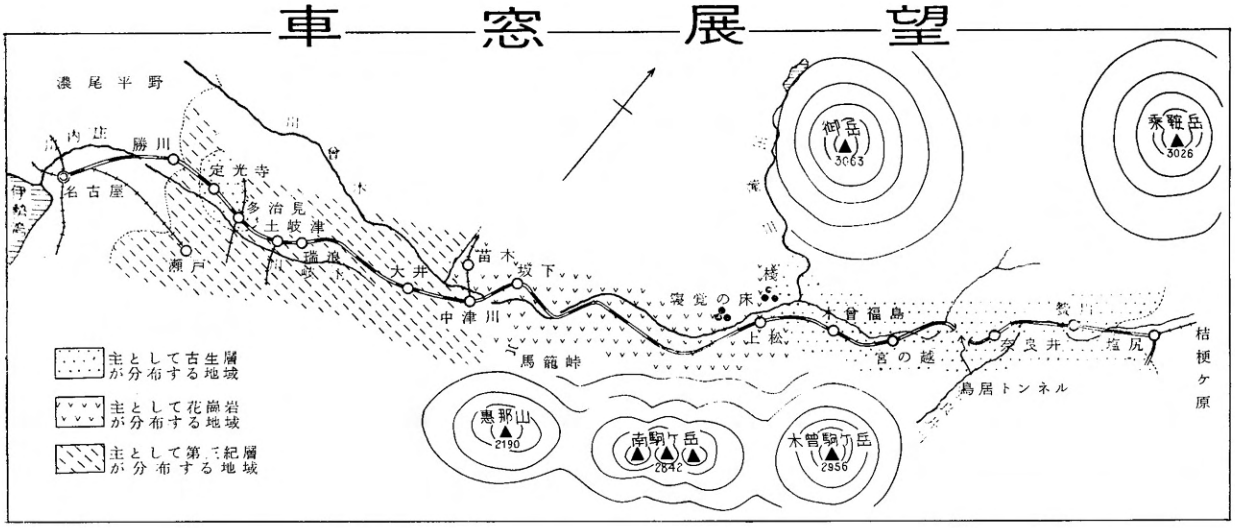
車窓展望



中央線の巻
（続）

☆☆☆ 塩尻 —— 名古屋 ☆☆☆

○ 鳥居トンネルに上る

中央線は塩尻で方向を南に転じ名古屋へ向う。ぶどう畑に囲まれた塩尻町付近からは、北方に美ヵ原高原が、またはるか北西方に乗鞍岳・常念岳など北アルプス南部の山々が望まれる。

北アルプスは乗鞍岳・焼岳などの火山岩と、中生代の花崗岩・石英斑岩などからなり、高度・幅・長さの3拍子揃つて本邦山脈中の最大規模をほこり、久しく登山者のメッカとして仰がれている

古生層の谷を、信濃川上流の奈良井川に沿つてさかのぼれば谷は漸次せまくなり、贄川（にえかわ）の部落から、「木曾路はすべて山の中である」といわれた山峡の21里・木曾街道がはじまる。

南進すること約30分、山がせまつて窮まつたところ、奈良井駅をすぎるとやがて中央線東線・西線を通じての最高所・海抜972mの鳥居トンネルを通過する。

このトンネルは善知鳥（うとう）トンネルなどと同じく日本海・太平洋の分水嶺をうがつている。それゆえトンネルを通過してから眼下にみえるのは木曾川の上流であつて、今までの奈良井川とは全く逆方向に流れて伊勢湾へとそそいでいる。

○ 木曾駒と御岳

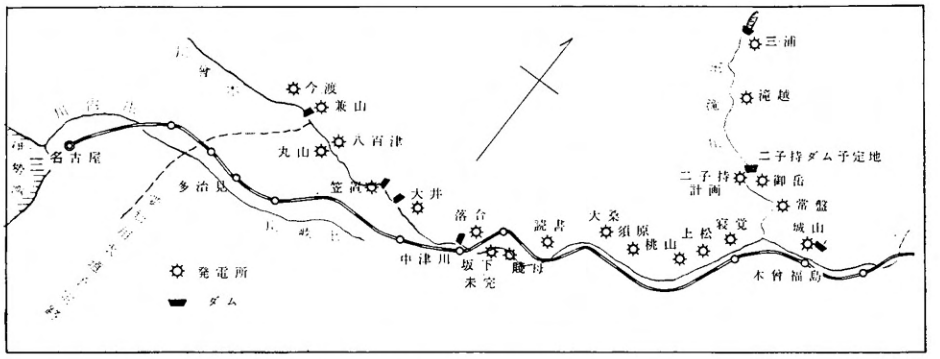
木曾義仲で由緒ある宮の越駅を過ぎるあたり、車窓左側はるかに中央アルプス（木曾山脈）の主峯木曾駒ケ岳（海抜2,956m）がそそりたつている。

中央アルプスは花崗岩類・片麻岩を主とする領家変成岩類からなる山脈で、その東西両側は断層によつてそれぞれ木曾谷と伊那谷に深く落ち込んでいる。これら断層運動を伴つたこの山脈の隆起は第三紀のころという。

宮の越駅南方の沿線からみた木曽駒の遠望

棧（かけはし）の縁にみられる水蝕の1こま

ここの地形は北アルプスや南アルプスに比較してかなり単調であるが、近年、交通の至便さと、その独特の美しさとが認識されてきた。



木曽川水系の発電所およびダム

関所で知られた木曾福島を過ぎてしばらくすると、王滝川・木曾川の合流点にさしかかる。天候さえよければ、ここから王滝川の谷間を通して、どつしりと孤立した信仰の山・**木曾御岳**（海抜3,063m）が見上げられる。

○奇観を呈する花崗岩

御岳をのぞんでから数分、岩壁上の短いトンネルへ入る寸前に、かつての街道の難所・桟（かけはし）の縁が見おろされる。波のようにきざまれた花崗岩が誠に奇観である。

塩尻駅からつづけて古生層地帯を通つていた中央線はここから花崗岩の山を貫ぬいて進むことになる。

縦横に発達した節理がみられ、更にそれらの岩石を流水が彫刻して作つたさまざまな凹凸のある岩肌があきることなくつづいている。

木曾の5木で知られた広大な国有林をひかえ、木材で有名な上松（あげまつ）町をすぎて間もなく、右手下方にのぞまれる「**寝覚の床**」はその代表的な花崗岩の景観で、立方形の花崗岩によつて組立てられた峡谷は、街道中随一の景勝地である。

このあたりから、木曾川は何本かの断層でできた谷に沿つて南西へと向う。

○連鎖式の発電所

上松町付近からは大小の水力発電所とその用水を取り入れるためのいくつかのダムや取入口が見られる。

王滝川も含めて木曾川流域は、ダムを作るに適した硬い岩盤がつづいているため、わが国有数の電源開発地帯となつている。

先ほどの王滝川上流には高さ97mの三浦ダムがあり、最近また愛知用水計画に伴う水量調節用の、更に大きなダムの建設が急がれている。

車窓からのぞむ寝覚の床

木曾川本流に入つてからも発電所が木曾川の流水を完ぺきに利用して作られており、多数の用水取入口が目に映る。

木曾川の流水のあらましはこうして発電用水路に導かれてしまつているので、その昔筏流しで知られた木曾川の河況は今はもはやその面影を残していない。

石をのせた野尻の部落

沿線にみられる陶土採掘場

○放射能の山近く

上松駅から数10分、坂下駅につけばもう美濃路である次の、ダムのほとりにある落合川駅付近で、車窓左側に望まれる山蔭には、島崎藤村の遺跡で知られた「**馬籠**(まごめ)**峠**」が昔の姿そのままに残つている。ここで木曾路と別れ、逐次視界はひろがり次第に暖国の趣をそえてゆく。

中津川駅からは、苗木方面に通ずる北恵那鉄道が分岐している。この苗木地方は、福島・岡山・鳥取各県の花崗岩地帯などとともにウラン鉱の候補地として浮び上つてきた。その資源は、今までずつと眺めてきた花崗岩・「**苗木・上松花崗岩**」と呼ばれているもの、およびその風化した砂の中に含まれた鉱物で、放射性物質を微量に含有していることからウラニウムの発見が期待されているのである。

○陶土採掘地帯と化石産地

中津川市の周辺から地質は一変して、川すじの低地帯には花崗岩をおおう軟弱な第三紀層が堆積しており、山は次第に高度を減じて、ゆるやかな丘陵性の起伏を示すようになる。そして汽車は大井駅を最後に木曾川の河岸をはなれて土岐川の流域に向う。

土岐川流域の第三紀層の大部分は「**瀬戸層群**」と名づけられた陸成層で、この分布地域は古来から陶磁器用陶土の産地として著名であり、主として花崗岩の風化土・火山灰の堆積層を求めて大小の露天堀などが行われている。特に土岐津・多治見および瀬戸などは窯業の中心地で、車窓からも陶土の白い露頭を背景に窯焼工場の黒煙を望むことができる。

もう一つ、第三紀層中の化石産地も地質学上から忘れることはできない。それは、瑞浪(みづなみ)から土岐津付近には、瀬戸層群より更に古く堆積した「**瑞浪層群**」と称される海成層が露出しており、この中からは貝やときには哺乳類の化石を多産するのである。

○濃尾平野に入る

汽車は多治見駅から定光寺駅付近までの古生層の地帯を通り、その間多数のトンネルをくぐり抜ける。

勝川駅に到着すればここはすでに濃尾平野の一隅で、これから先は平坦な路盤の上を一路中央線の終着駅へと向かう。土岐川は庄内川と名が変り、その河岸には伏流水を利用しているいくつかの染色工場が並んでいる。

車窓左側はるかに望まれる名古屋東山一帯の丘陵は、名古屋市の地下地質がそのまま地上に露出している格好となつており、硬い地盤のためにこよない住宅地として大名古屋市の都市計画に貢献している。

(地質部)

小説「夜明け前」の舞台
馬籠(まごめ)峠